172

入来遺跡

（日置郡吹上町入来）

位置と環境

吹上町は，薩摩半島の西岸中程に位置し，東に低山性の金峰山地が位置して町の面積の大半を占め，伊作川が西流して東支那海に入る。下流には海岸平野を形成し，前面は吹上砂丘となって松林に覆われている。海岸平野は解析によって分断された低平なシラス台地と，沖積低地とが交錯し，沖積低地は水田として利用され，シラス台地では畑作が行われ，集落の成立が見られる。

伊作川の下流で，支流の梨子川が合流し，南の下戸川の支流の谷とで囲まれて，入来の集落がある。

集落は標高20mほどのシラス台地で，周辺を水田に囲まれ，北東に舌状に張り出している。この舌状の張出し部分が入来遺跡である。

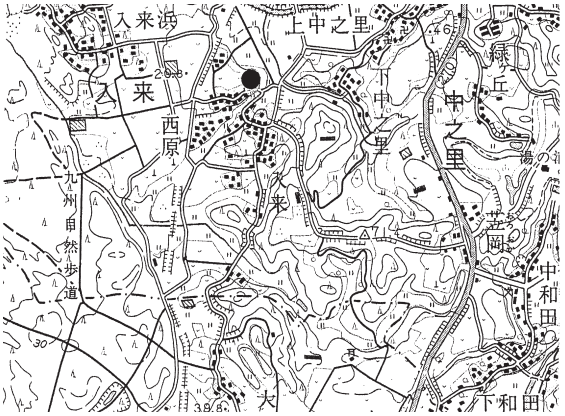
調査の経緯

遺跡は吹上高校社会研究部によって発見され，昭和44年７月，昭和45年10月、50年４月の三次に渡る，調査面積473.7㎡，調査延べ日数105日，参加人員88名，調査延べ人員412名の有志者の研究活動によって，遺跡破壊の厄に合いながら調査を実施することができた。無償の研究活動であった事を記録する。

遺構と遺物

北東地区南斜面の遺構

遺跡発見の端緒となった地主である東学氏の旧住宅跡地で，最初に発掘した地点である。A・B・C・F・E地点を発掘したが，撹乱のため遺構を確認できず，遺物の採集に止まった（第２図）。



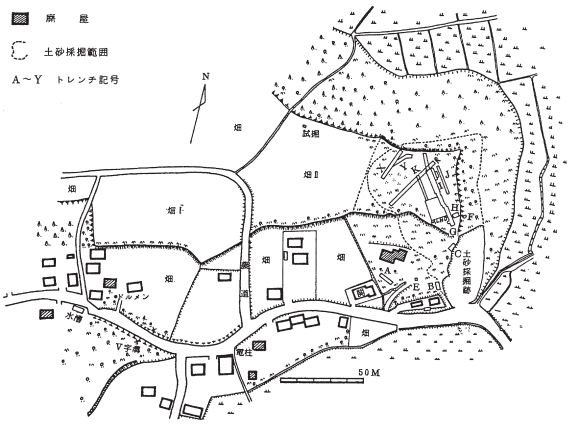
第１図　入来遺跡の位置

北東地区台地の遺構

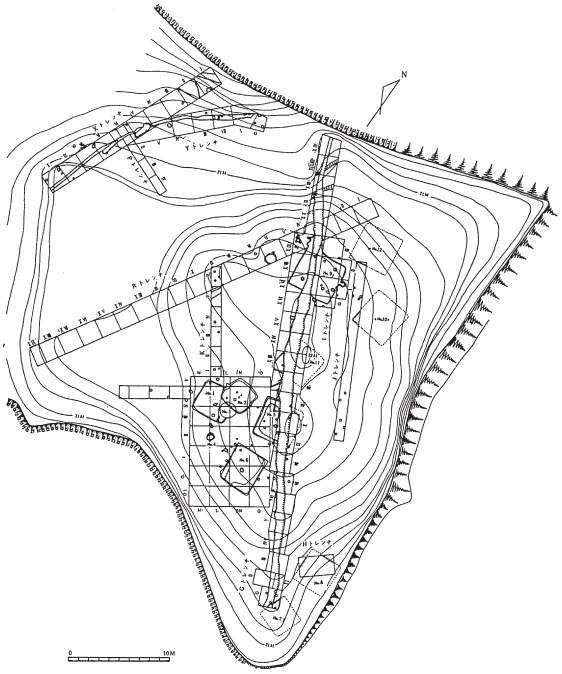
北東地区南斜面の北東に隣接する台地の調査で検出された遺構は，台地を横断するＶ字溝１，Ｕ字溝１，弥生中期の貯蔵穴１，古墳時代の住居跡群である（第３図）。

Ｖ字溝

東北地区台地は，中央部分で標高22m，周辺へ低くなり，北辺では20.7mとなっている。この最高地点を通って，北々西→南々東の方向に台地を横断するＶ字溝を発見し発掘した（第３図）。Ｖ字溝の規



第２図　入来遺跡調査地点図



第３図　入来遺跡東北地区図

模は，平均して幅１m，深さ１m，発掘した長さは47.6mである。側壁の傾斜角度は65°～72°底部は平均13cmほどの平担面となっており。基盤のシラス層まで掘り込まれている。

溝は中央の20mは略平坦で，南部と北部は末端へ向かって傾斜しており，それぞれ14mほどである。これらを三区分して概要を述べる。

Ｖ字溝南部14ｍ区間

この区域は最も遺物が多く，完形の壺形土器３個，甕形土器４個，蓋形土器１個が出土し，この他大量の土器片が出土しているが，高坏は一個もみられない。石器では鑿形石斧・打製石斧・砥石・石鏃・自然礫などが出土している。特に注意されるのは，長期に渡る焚き火の跡が二か所あり，木炭・灰・焼礫と共に焼けた獣骨が存在することである。

Ｖ字溝中央20ｍ部分

幅，深さ共に最大である。壺２個が上下に重なって出土し，透入りの特殊な脚台が見られる。焚き火跡の存在は南区と同様で，木炭・焼けた獣骨が出土する。この区では炭化したイチイガシの堅果が下層・上層と切れ目なく出土し，壺形土器ではなく，甕形土器に入れて保存食としていたことが判明した。

石器では磨製石斧・抉入石斧・鑿形石斧・磨製石鏃・打製石鏃・砥石・叩石が出土し，軽石製品で岩偶・環状錘飾が出土している。

Ｖ字溝北部14ｍ部分

幅が急に狭まり，表面に段落ちがあり，傾斜も急になっている。溝中の遺物は極端に少ない。壺形土器の口縁部と甕形土器の大片が出土し，石器では石製有孔円盤・打製石鏃・石庖丁の出土が見られる。

Ｖ字溝を概括すると，台地の先端を区画して内部の生活区を意識した施設であると言えるが，ただ区画としてだけではなく，住民の生活と深く関わっており，その性格をも示す要素を持っている。生活に重用な壺形土器・甕形土器の完形品が多量に貯蔵されて貯蔵庫の役目を持っており，狩猟で得た獲物の調理の場所でもあり，採集されたイチイガシの堅果の貯蔵の場所でもあった。

高橋貝塚では籾痕のある土器が多く発見され，甑が多く出土して，米を蒸して食べたことがわかっているが，入来遺跡では籾痕も甑もみられない。しかし狩猟や採集の生活は受け継がれていたようである。

出土する土器は，Ｖ字溝の掘削によって掘り出された下層の縄文土器以外は，すべて単一のタイプである。出土した土器は相当の期間，風雨に晒されていたと見られ，器面は風触で磨耗して，粒子が浮き出し，ザラザラとした感触を受ける。

Ｕ字溝

調査地域の西側境界に沿ってＵ字溝を発見し調査した。Ｕ字溝はＶ字溝北端から西８m，台地北崖端から2.5mの地点に始まり，Ｖ字溝と八字を描くように弧状に伸びて23mの湾曲した溝状遺溝となった(第３図)。規模は溝幅平均30cm，深さ20cmで，中央が高く21.2m，両端へ傾斜している。出土遺物は少なく中央付近に壺形・甕形の弥生式土器片を若干出土している。土地の区画を意図したものであろう。

貯蔵穴と住居跡

貯蔵穴はＧＸＩ区Ｖ字溝の西２mに発見した。古墳時代の住居跡２基と重なって出土したので，住居跡を№１・№２，貯蔵穴を№３とした。貯蔵穴は直径160cmの円形で，深さ30cm，床面に下るにしたがって僅かに広がっている。貯蔵穴は№１住居跡によって西側の大半を削り取られ，また№２住居跡によって北側の一部を削り取られているが，両住居跡共に床面が浅いために，貯蔵穴の下半分は完全に残存していた。

貯蔵穴は中心部から東へ甕形土器と蓋形土器が出土し，鏃１のほか床面に木炭・獣骨・漁骨が相当量出土し，中心付近の北側では，焼土に覆われた土器が出土した。この貯蔵穴の南２mには径90cm深さ30cmの楕円形土抗があり，甕形土器片・脚台・軽石礫が出土し同様の遺構と思われる。共に弥生中期前半の土器である（第３図)。

住居跡

住居跡は古墳時代に属するもので，Ｖ字溝に沿って10基出土したが，地主の採土によって破壊され，調査できたのは10基の内５基であった。第１住居跡は，隅丸方形で，１辺360cm前後で，深さ15cm。四隅に柱穴があり，床面に成川式土器が出土した。第２住居跡は第１住居跡・第３貯蔵穴と重なって出土

した。隅丸方形で，一辺300cm前後，柱穴はあるが，屋根との整合性はない。成川式土器片・須恵器片が出土している。第５住居跡は，第２住居跡の東に接してＶ字溝と重なって出土したが，西側半分の調査に止まった。一辺400cm余り，内面に，壁に沿って40～50cm幅の溝を巡らしている。10個のピットがあるが上屋との関係は不明である。成川式土器片が出土している。第６住居跡は第５住居跡の南に接して出土した一辺350cm前後の方形住居跡である。壁に添って内部に部分的に溝を巡らしている。注目されたのは，住居跡の東と西の壁の外側に接して，対蹠点に鉢形土器を埋め，西側の土器の地点では焚き火を繰り返した跡があった。成川式の土器と共に須恵器の出土が確認された。ＧＸⅦ区のＶ字溝と重なって第９号方形住居跡が出土した。一辺が400cmを越えるもので，壁面に張出しのあるのが特徴である。成川式土器の出土が見られるのはほかと同様である。

土器

従来南九州では弥生中期前半の時期に属する土器文化の発見がなく，この時期は空白となっていた。入来遺跡の弥生土器はまさにこの時期に該当するもので，始めて前期から中期への文化の流れが明らかになった。入来遺跡の弥生土器について述べる。

第１類土器（第４図７）はＵ字溝出土。甕形土器，胴部が張り底部へ急に細くなり．僅かに上げ底気味の平底である。口縁部は外反して，平坦面を作り，頸部に一条の凸帯を巡らす。口縁部と凸帯には浅い刻み目を施す。口径28cm，高さ30cm。高橋Ⅱ式該当（考古学集刊３－２）弥生前期後半。

第２類土器（第４図，７を除く，第６図）

入来遺跡の主体を成す土器である。Ｖ字溝と第３貯蔵穴で出土している。壺形土器の肩部に沈線，甕形土器口唇部に刻み目，頸部に沈線または刻み目凸帯を巡らすのが特徴で，高橋Ⅱ式の施文慣習の影響と見られる。この時期に始めて甕形土器に脚台が現れて，南九州の甕形土器の顕著な特色を形成する。

第３類土器（第５図）

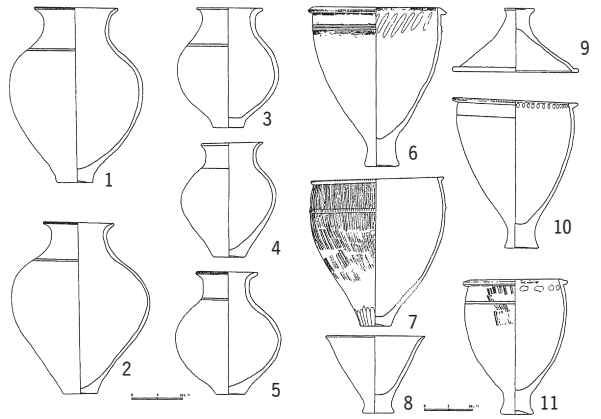
主として北東地区南斜面に出土している。高橋貝塚出土の高橋Ⅲ式（考古学集刊だ３巻第２号）・轟木迫第４層概当（暗紫ゴラ下層）壺・甕土器に絡縄凸帯を巡らすのが特徴で，一ノ宮遺跡出土の一宮式より一時期遡る時期に当たる。

第４類土器（古墳時代の土器）

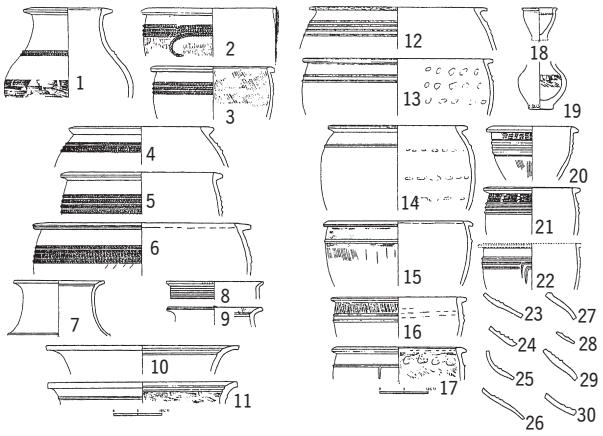
遺跡全域の上層から出土する土器で，調査では東北地区台地の住居跡から出土した。成川式と須恵器である。第７図に示した土器の内，11・12の土器を除いて他は全て６号住居跡から出土した。成川式土器では絡縄凸帯の結び目が上に跳ね上がるという著しい特徴があり，鉢形土器の底部に下向きの隆起が見られ，須恵器の蓋杯・堤瓶との共伴関係を示す良好な資料である。６世紀に属する。

甑はほかの住居跡にも見られこの時期にこの遺跡では一般的に使用されたことを示している。

第５類土器（縄文土器）



第４図　入来遺跡出土壺形・甕形・鉢形・蓋形土器
１：ＧⅠ，　２：ＧⅢ，　３：ＧⅩⅦ，　４：ＧⅦ，　５．ＧＸⅠ
６：ＧⅣ，　７：ＵＹＹ，　８：ＧＯ，　12：ＡⅡ１，　６：ＧⅣ，



第５図　入来遺跡北東台東台地東斜面出土の土器ほか
12：ＡⅡ１，13：関宅，14：ＢⅠ２，15：関宅，16：ＢⅠ１，17：ＢⅡ２，18～Ｇ，19：ＡⅡ１，20：Ｂ01，21：関宅，22：Ｂ01，23～30：Ｇ

遺跡全域の下層から出土した土器である。縄文の早期前半と後期の土器で，纏まったものはなく，遺構も明らかでない。しかし早期および後期の縄文文化が存在していた事は確実である。

土器以外の遺物としては，石器・軽石製品・獣骨・堅果などがある。

石器では，弥生特有の抉入石斧・鑿形石斧・石庖丁のほか，磨製石斧・打製石斧・石鏃・叩石・特殊な物としては石製有孔円板・軽石製岩偶・軽石製垂飾・軽石製石棒などその生活の特殊性を示すものがめだっている。

本遺跡では，縄文の散布が見られた後，弥生前期後半の時期にU字溝が作られ，続いて弥生中期前半にいたって，台地先端部を横断してV字溝が作られ，内側に円形の貯蔵穴が設置された。弥生中期中葉にいたって文化は東斜面に移ったが，遺構は撹乱されて判明しない。時を隔てて古墳時代にいたって台地北部に集落が営まれるに至った。この遺跡の特徴は新しい農耕文化と共に，獣骨の出土や多量のイチイカシの堅果に見られるように高橋貝塚以来の採集経済的様相を帯びたものであった。

資料の所在

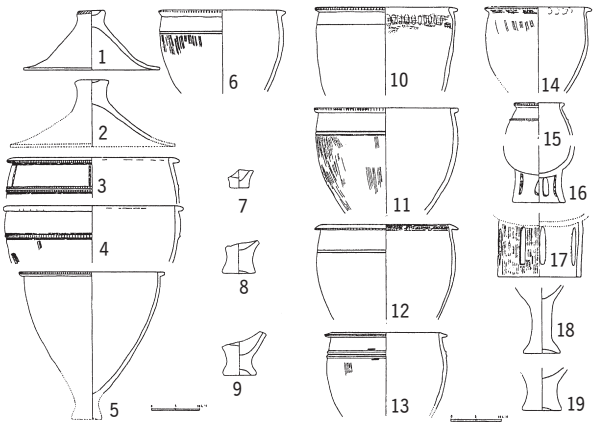
出土遺物は，河口貞徳宅に保管されている。

参考文献

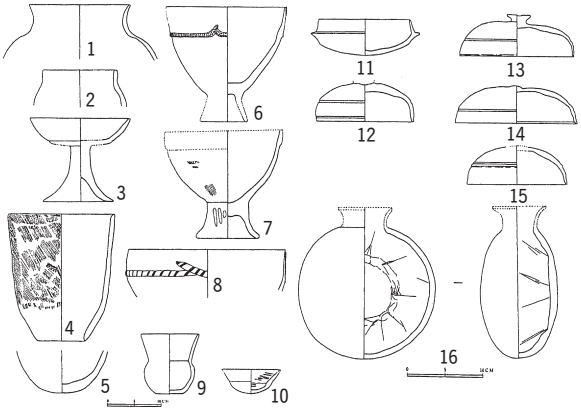
河口貞徳1976「入来遺跡」『鹿児島考古』第11号 鹿児島県考古学会

河口貞徳1965「高橋貝塚」『考古学集刊』第3巻2号　東京考古学会

（河口貞徳）



第6図　入来遺跡出土の土器
1～9：第3号貯蔵穴出土，10～19：B字溝出土地



第7図　6号住居跡出土の成川式土器と須恵器
3列目上2個は8号住居跡ほか

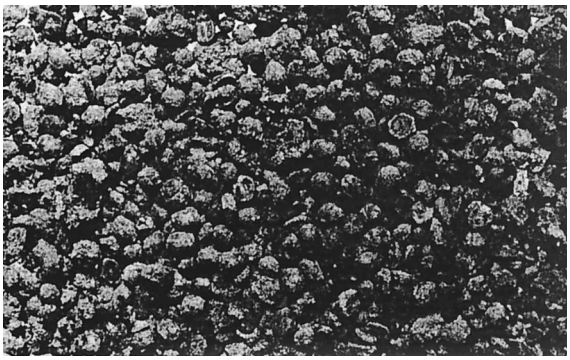


写真1　G：14出土木の実